

言語危機を抱える甑島における言語状況の考察

祖慶 壽子*

Abstract

Among thousands of languages existing at the present time, half are in danger of disappearing. UNESCO reported that 6 languages of the Okinawan Islands are endangered. Koshiki Island located in the city of Satsumasendai in Kagoshima Prefecture faces similar problems. This article introduces not only the current language challenges faced by islanders but also suggests the idea of giving hope to elderly people by enlisting their help in teaching the local language to younger generations.

1. はじめに

世界には何千という言語が存在しているが、その数は年々減少し今世紀末には半減するとも言われている。ユネスコは絶滅が危惧されている言語を公表していて、世界では2500の言語、日本では沖縄県の6方言と小笠原方言とアイヌ語がリストに掲載されている。(ただし、ユネスコでは方言と言語とを区別していないため、8言語となっている。)しかしながら、そのリストに掲載されていない甑島の言語状況がそれら8言語にも劣らず危機的であるとの報告がある¹ことと、今年度の清水基金プロジェクトは甑島に焦点を当てていることから、甑島での言語状況を調査することにした。

2. 甑島の概要

甑島は、薩摩川内市の川内川河口から西方約26kmの東シナ海上に位置し、北東から南西方向に35kmに連なり、北部に位置する上甑島、中部に位置する中甑島、南部に位置する下甑島の3つの島から形成されている²。

甑島の行政区分は複雑で、上甑島に里町と上甑町があるが、上甑町は中甑町の全域も占めている。下甑島には鹿島町と下甑町がある。このように、島名と町名が一致していない。上甑町には中甑地区、江石地区、中野地区、小島地区、瀬上地区、桑之浦地区、平良地区がある。なお、甑島は薩摩川内市の一部である。

2.1 甑島の名称

薩摩川内市のホームページには次のように記述されている。

キーワード：甑島，方言調査，保存，社会福祉協議会

* 本学国際文化学部教授

1 木部暢子『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』（2011） 国立国語研究所

2 薩摩川内市のホームページ

「甌（こしき）」の名が日本の歴史に記されたのは古く、「続日本紀」の宝亀（ほうき）九年（778年）11月の条に初めて見え、「倭名類聚鈔（わみょうるいじゅしょう）：和名抄：わみょうしょう）：934年頃選」には、「甌島：古之木之万（こしきしま）」と読み方が注記されています。また古書には、「古敷島」「小敷島」「古志岐島」などと書かれ、歌人は「沖津島」とも詠まれています。

このように名称にも多くの変遷があり、歴史的にも次の記述があるように、古くから中央との交流もあったようである。

八世紀の中ごろ、薩摩隼人・大隅隼人（おおすみはやと）・阿多隼人（あたはやと）などの小王と共に、甌隼人の小王麻比古も、この小さい島から、宮門警護のために僅かばかりの兵を率い、はるばる奈良の都まで上がって勤番し、その功績により、他の隼人の小王らと叙位（じょい）されました。・・・「外従五位下」という位は、決して低い位ではないようです。

2.2 現在の状況

上記に見られるように、歴史的には任務上とはいえ、遠方との交流が盛んであった甌島ではあるが、交通の発達した現在においても上甌島・中甌島と下甌町との間の定期便は、川内港及び串木野港との間の通行と同じ頻度であり、隣接地域であるわりには頻繁ではない。また、上甌島と中甌島の上に橋が架けられたのも1993年とかなり最近であることから、長年にわたり行き来のない状態であったため、それぞれの主に地域内のみで言語が変化し、その結果、他地域の言語（方言）との間に大きな差が生じたと思われる。



図1 甌島の位置と行政区画
（薩摩川内市ホームページより 2020年1月10日）

3. 研究の目的

研究の目的は甌島の言語状況とその話者の使用状況である。先行研究により一部地域の発音と文法に関しては詳細な報告書が書かれているが、まだ全島の言語状況がすべて把握されているわけではないことから、研究の余地があると考えた。また、言語調査の多くは言語のみや、その保存方法に絞っていることが多いが、今回は言語の使用者及び言語継承状況だけでなく、使用者を支援する側にも焦点を当てた。その理由は、方言の使用者が家族や友人以外に接触する人の中では社会保障関係の支援者が方言を最も使用するのではないかと考えたからだ。その使用状況を知ることにより方言話者が他者との間の意思疎通がどのように行われているかを、別の角度から把握できると考えたからである。また、支援する側としても仕事に支障なく遂行するためには意思疎通が不可欠であるため、両者の最も効率の良い意思疎通の手段を選択していると思われることから、言語使用の実態を把握することができると考えた。したがって、限られた時間の中で、次回にどの方面から取り組めば良いか見極めるため、今回の調査は複数の角度から調査を

行うことで次回のさらなる詳細な調査のための予備調査的位置づけとなっている。

4. 先行研究

最近の最も大規模な調査として国立国語研究所の行った「鹿児島県甌島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」がある。これは人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」(2011)のサブプロジェクトで、窪園晴夫(国立国語研究所)を研究代表者、黒木邦彦(啓明大学)を中心とした若手研究者14人による文法研究班が調査研究を行い、それをまとめたものである。同書によると、このプロジェクトの大きな特徴は、ある地域の(この場合は上甌島の里地域)方言の全体像を後世に残すことにある。これまでの伝統的な調査では、ある調査地の特徴的な現象を細かに研究し標準語との相違点を見つけ、比較し、その規則を発見するものであった。つまり、窪園他の調査方法は文法の全体的な記述することに主眼があり、伝統的なこれまでの研究は方言の他地域とは異なる部分に注目している。伝統的な調査方法による文献として上村孝二の諸論文があげられる。窪園の調査研究につながるものとして木部(2011)は「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書」の中で、下甌町鹿島の調査を行ったとあるが、同論文では甌島アクセントの紹介として、上甌村(当時)の瀬上をあげている。このように甌島の一部地域しか詳しい調査は行われていないようである。したがって、アンケートの回答にもあるように、方言が各地域により大きく異なる甌島においては、アクセントのみに関しても全体像を捉えるのにはまだまだ調査が必要である。以下に、甌島の中でも現在調査が進んでいる地域のアクセントの特徴を紹介する。

4.1 甌島方言の特徴(瀬上地区)

以下の記述は木部(2011)の論文中の瀬上方言に関する記述を簡略にまとめたものである。

4.1.1 音声、音韻の特徴

- 1) 語中の子音の発音が共通語とは大きく異なっている。例えば、語中ではタ行が[r]で発音され、ラ行が[j]で発音され、ダ行とザ行が[n]で発音される。

語中の子音の発音が標準語と大きく異なる。

| | | | | | |
|---|----|---|----|-----------|-----|
| 例 | タ行 | → | ラ行 | 頭=アタマ→アラマ | [r] |
| | ラ行 | → | ヤ行 | 裏=ウラ→ウヤ | [j] |
| | ダ行 | → | ナ行 | 喉=ノド→ノノ | [n] |
| | ザ行 | → | ノ行 | 火事=カジ→カーニ | [n] |

- 2) 語中のカ行が[g]に、タ行のチ・ツが[d]に発音される。(語中の有声化)

| | | | | |
|---|----|---|----|---------------|
| 例 | カ行 | → | ガ行 | 中=ナガ(naga), |
| | ナ行 | → | ダ行 | 熱=ネーズ(ne:dzu) |

- 3) 長音化(語末にイ音列、ウ音列を持つ単語は直前の音が長くなる。)

例 夏 ナツ→ナーツ

4.1.2 アクセントの特徴(瀬上地区)

アクセントは共通語と大きく異なるが、鹿児島市方言と類似し、2種類の型しかない2型アクセントである。ただし、鹿児島市方言と異なるのは鹿児島市方言が高い部分が2カ所であるのに対し、甌島瀬上では2カ所であることである。

鹿児島市

例) A型 ハ↓(葉) ハ↓ナ(鼻) オナ↓ゴ アバラボ↓ネ(あばら骨)

B型 ハ↑(歯) ハ↑ナ(花) オト↑コ カライ↓モ(さつまいも)
甌島
例) A型 ハ↓(葉) ハ↓ナ(鼻) オナ↓ゴ アバ↓ラボ↓ネ(あばら骨)
B型 ハ↑(歯) ハ↑ナ(花) オ↑ト↑コ カ↑ライ↓モ(さつまいも)

5. 調査の対象と方法

上記の研究の目的にもあるように、今回は今後の調査研究のための予備調査である。その方法はできるだけ広範囲の地域を調査し概略を得ることと、今後最も力点を置く箇所を見つけることであった。その目的から、日帰りという時間的な制約があったものの、社会福祉協議会甌支所の皆様の協力のもと、広い地域を調査することができた。

5.1 調査地点と対象

調査を行った地域を次にあげる。江石地区、瀬上地区、桑之浦地区、小島地区、平良地区、中甌地区、中野地区の里地区順に調査した。時間の関係上、それぞれの地区には20分程度ほどしか滞在はできなかったが、調査項目を絞り、言語資料の採取は録音装置を利用したため、地区により多少の差はあるが調査はほぼ順調に行うことができた。

調査の対象は上述の薩摩川内市社会福祉協議会の上甌支所よりサービスを受けている住民と、その担当者である。したがって、担当者による呼びかけにより積極的な参加が得られた。

5.2 調査期間と調査方法

調査は9月17日、調査地点は本稿で紹介する里町と上甌町を含む8地域である。調査は上述の通り2種類あり、住民と担当者の両方であった。しかしながら、住民に関しては口頭での質問には積極的に返答してもらえたが、文字が読み辛いという理由で書面によるアンケートの回収は少数であった。また、音声の文字起こしには時間がかかるため、住民の言語調査は今後に回し、本稿では担当者を中心にまとめることにした。人数は回答者：里町(9)、瀬上町(1)、上甌町(11)である。

アンケートの項目は以下の通りである。住民とは異なる質問である。また、担当者には口頭での質問はない。その理由として、担当者には方言そのものの状況を調べるためではなく、担当住民との間の使用状況や感想を採取するためだからである。

- 問1 担当の区域の方言を理解できますか。
- 問2 方言を知らないことで困ったことがありますか。あった場合、どんなことですか。
- 問3 方言を理解できたことで良かったことがありますか。あった場合、どんなことですか。
- 問4 住民の方との会話は共通語ですか。方言ですか。
- 問5 子供たちが方言で話しているのを聞きますか。
- 問6 学校での方言教育は必要だと思いますか。その理由は何ですか。
- 問7 自分の地域の方言は好きですか。
- 問8 方言が(もっと)できるようになりたいですか。
- 問9 次の世代にも方言を伝えたいと思いますか。「はい」の場合、どうしてですか。
- 問10 方言で好きな言葉は？
- 問11 方言で嫌いはことば。
- 問12 方言は将来どのように使用されるべきか。

問13 方言に関することなら何でも書いてください。

以上が質問でその結果を次のように表やグラフに表した。1問につき1から5までの5段階から選ぶ質問と、それに関連してその理由等を記述する部分があるため、5段階で回答ができる問題への回答は、問4以外は全体を表1にまとめた。それらの回答として最も肯定的な場合は「5」を最も否定的な場合は「1」とし、それらを含め5段階で回答してもらった。回答用紙には1から5までの数字とともに、5は「とても良い」または「とてもそう思う」1は「とても悪い」「全然そうは思わない」と説明を付けた。

問4に関しては表2にまとめた。問4以外の記述式回答の部分は表3にまとめた。地域差があるかどうか調べるため、人数の多かった里町と上甑町の比較を行い、その結果を表4と表5にまとめた。表2、4、5に関してはその結果を視覚的に捉えられるように、それぞれを図2～4で表した。

6. アンケートの結果

6.1 5段階回答結果のまとめ

上述したように、表1は質問のうち5段階で回答できるもの（問1、問2前半、問3前半、問4～6前半、7～8前半）をまとめたものである。担当の区域の方言を理解できるか（問1）との問いには大変理解しているとの回答は2人で10%であるが、多くの人は普通（48%）または理解している（33%）回答であり、理解している人が多いようである。地域差は顕著ではない（本稿では後に述べる里町と上甑町との比較しか触れていないが、実際は他の項目全てに関して地域差を調べた）。問2では、方言を知らないことで困ったことはそれほど多くは無く、この質問に対してもあまり地域差はないようである。ただし5段階式では無回答が24%と多かった。問3の方言を理解できたことで良かったことがあるかの問いには、全体としてはある程度有るとの答えであった（普通以上が67%）。問5の子供たちが方言で話しているのを聞くかどうかの質問に対して、ほとんどは聞かない（81%）とのことである。問6の学校での方言教育は必要だと思うかの質問に対しては多くの人は否定していない（普通以上91%）。問7の自分の地域の方言は好きか、の問に対しては「好きではない」（10%）と回答をした人は少数であった。問8の方言が（もっと）できるようになりたいか、との質問には「できるようになりたいと思わない人」は29%である。問9の次の世代にも方言を伝えたいと思うか、の質問に対しては伝えたいが多かった（否定的な人と無回答は15%）。

表1 支援者の担当地区の方言に関するアンケート（甑島全体）（5段階回答）

| | 回答結果 | | | | | |
|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 無回答 |
| 問1 | 2人 | 7人 | 10人 | 1人 | 1人 | 0人 |
| | 10% | 33% | 48% | 5% | 5% | 0% |
| 問2 | 2人 | 3人 | 3人 | 2人 | 5人 | 5人 |
| | 10% | 14% | 14% | 10% | 24% | 24% |
| 問3 | 2人 | 5人 | 7人 | 0人 | 2人 | 4人 |
| | 10% | 24% | 33% | 0% | 10% | 19% |
| 問5 | 0人 | 1人 | 3人 | 5人 | 12人 | 0人 |
| | 0% | 5% | 14% | 24% | 57% | 0% |
| 問6 | 5人 | 5人 | 7人 | 1人 | 2人 | 1人 |
| | 24% | 24% | 33% | 5% | 10% | 5% |
| 問7 | 5人 | 5人 | 9人 | 1人 | 1人 | 0人 |
| | 24% | 24% | 43% | 5% | 5% | 0% |
| 問8 | 1人 | 3人 | 11人 | 2人 | 4人 | 0人 |
| | 5% | 14% | 52% | 10% | 19% | 0% |
| 問9 | 6人 | 3人 | 9人 | 1人 | 1人 | 1人 |
| | 29% | 14% | 43% | 5% | 5% | 5% |

以上が5段階式回答の部分のみの結果である。問4と質問に続く理由を問うたものへの回答は以下の項目で述べる。

6.2 選択肢式回答結果のまとめ

住民の方との会話は共通語で行われているのか、との問4の質問には圧倒的に多くの人が共通語と答えている。その結果を以下に表2と図2で表す。

表2 支援者と担当地区住民との会話の使用言語（全体）

| | 共通語 | 共通語多用 | 両方 | 方言 | 方言多用 | 無回答 |
|----|-----|-------|-----|-----|------|-----|
| 問4 | 11人 | 0人 | 7人 | 2人 | 2人 | 1人 |
| | 52% | 0% | 34% | 10% | 10% | 5% |

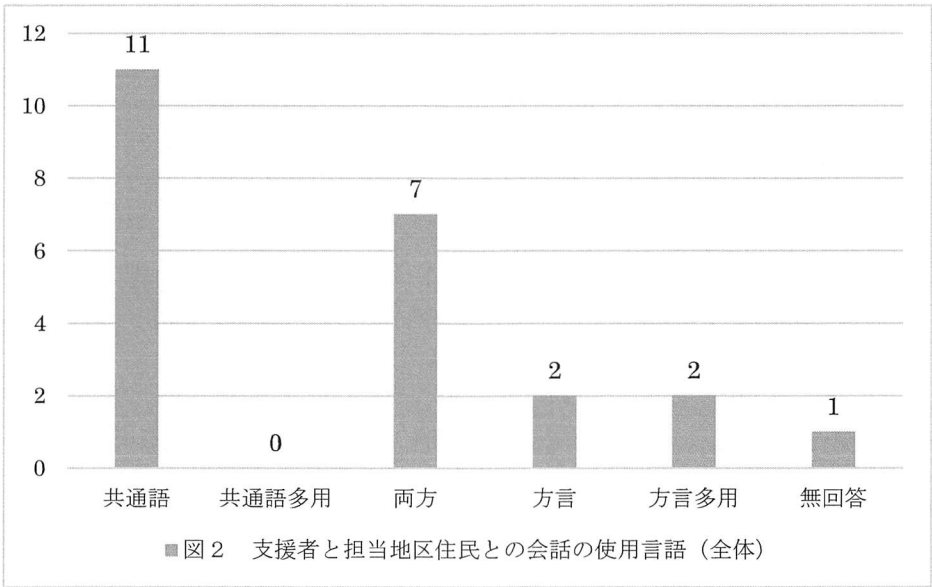


図2 支援者と担当地区住民との会話の使用言語（全体）

6.3 記述式回答結果

記述式質問4のうちの「住民との会話は共通語か、方言か」の質問以外の回答と問2後半、問3後半、問6後半は完全に個々人が自由に回答しているのであるため、表3にまとめた。

表3 支援者と担当地区住民との間の使用言語状況の回答結果（記述式）

| 質問 | 回答 |
|---|--|
| 問2（方言を知らないことで困ったことがあるか、）ある場合はどんなときか。 | ・面接や電話対応の際、意味が分からなかった。 ・話が理解できなかった。（4） |
| 問3（方言を理解できたことで良かったことがあるか。あった場合、どんなことか。） | ・相手の気持ちが理解でき、伝え、スムーズに共有できる。（5） ・コミュニケーションがとれる、機会が増えた（4） ・親しみが持てる。 ・理解できたことを喜んでもらった。 |

| | |
|--|--|
| 問6 (学校での方言教育は必要だと思うか。) その理由は何か。 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域の文化として残しておいてほしいため。 ・地域の人とのコミュニケーションがうまくいく。方言特有の微妙な気持ちを言い表せることができる。(2) ・方言がなくなってしまうから。(2) ・子供たちが方言を通して地域に興味を持つようになったから。 ・方言を楽しく理解できる高齢者の減少。 ・英語が必修となれば、そちらを優先してほしいから。 ・簡単な方言くらいは知っていてほしいから。 ・わざわざ教育しなくても自然に残っていくと思うから。 ・地域性を大切にしていきたい。 |
| 問9 後半 (次の世代にも方言を伝えたいと思うか。)[「はい」の場合、どうしてか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域の文化や伝統を残してほしいため。(2) ・温かみのある言葉を残していきたい。 ・言葉で出身地がわかるため。(2) ・自然に伝われば良いと思う。 ・なくなるのはさみしいから。 ・方言はなくしてはいけなから。もったいないから。(2) |
| 問10 方言で好きなことば | おおきに (4), あっぱー, おごようよう (2), やいとん, ~し申す, おご, だあちい (3), やいもす |
| 問11 方言で嫌いはことば | どんきゅう, おまやあ |
| 問12 方言は将来どのように使用されるべきか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・方言を話せることによって、詐欺の被害が減るのではないか。 ・地域の中だけで使用されるべきだと思う。 ・日常の中で自然な形で使われてほしい (2)。 ・使えなくても何を言っているかわかることができたらいいと思う。 ・様々な年代の人とのコミュニケーションの1つとして (2) ・廃れないように残していく。 ・無形文化として使用される。 |
| 問13 方言に関することなら何でも書いてください。 | <ul style="list-style-type: none"> ・簡単に使用できる方言の教室があればいいと思う。 ・方言を利用する年代について具体的に知るべきだと思う。 ・昔ほど方言が使われなくなっている。 ・同地域内でも方言の差によってより細かく分類できると思う。 ・方言の内容を全く理解できないことはないと思う。 ・わからないときに聞き返すことによってより良いコミュニケーションをとることができると思う ・その地域の人にとって方言は何よりも意思を伝えやすい大切な手段だと思う。 ・今の方言話者を尊重していくこと、理解していくことなど自分たちにもできることをしていくべきだと思う。 ・子供たちにもっと方言の良さなどを知っていてほしい。 ・方言で地元を思い出す。落ち着く。 ・独特の地域の方言は宝だと思う |

6.4 地域別の比較

地域別の比較も行った。調査の回答のあった3町の内、瀬上町は1人だけであったので、里町(9人)と上甌町(11人)を比較した。表4は里町の表5は上甌町の5段階回答の結果である。図3と図4は表4と表5を図にしたものである。

表4 里町5段階回答結果（%の上段単位は人数）

| | 回答結果 | | | | | |
|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 無回答 |
| 問1 | 1 | 4 | 4 | 1 | 1 | 0 |
| | 9% | 36% | 36% | 9% | 9% | 0% |
| 問2 | 1 | 2 | 2 | 0 | 1 | 4 |
| | 9% | 18% | 18% | 0% | 9% | 36% |
| 問3 | 1 | 2 | 4 | 0 | 1 | 3 |
| | 9% | 18% | 36% | 0% | 9% | 27% |
| 問5 | 0 | 1 | 1 | 2 | 7 | 0 |
| | 0% | 9% | 9% | 18% | 64% | 0% |
| 問6 | 1 | 2 | 4 | 1 | 1 | 1 |
| | 9% | 18% | 36% | 9% | 9% | 9% |
| 問7 | 2 | 1 | 6 | 0 | 1 | 1 |
| | 18% | 9% | 55% | 0% | 9% | 9% |
| 問8 | 0 | 1 | 7 | 1 | 1 | 1 |
| | 0% | 9% | 64% | 9% | 9% | 9% |
| 問9 | 2 | 1 | 8 | 0 | 0 | 0 |
| | 18% | 9% | 73% | 0% | 0% | 0% |

表5 上甌町5段階回答結果（%の上段単位は人数）

| | 回答結果 | | | | | |
|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 無回答 |
| 問1 | 1 | 2 | 6 | 0 | 0 | 0 |
| | 11% | 22% | 67% | 0% | 0% | 0% |
| 問2 | 1 | 1 | 1 | 2 | 3 | 1 |
| | 11% | 11% | 11% | 22% | 33% | 11% |
| 問3 | 1 | 3 | 3 | 0 | 1 | 1 |
| | 11% | 33% | 33% | 0% | 11% | 11% |
| 問5 | 0 | 0 | 2 | 3 | 4 | 0 |
| | 0% | 0% | 22% | 33% | 44% | 0% |
| 問6 | 2 | 3 | 3 | 0 | 1 | 0 |
| | 22% | 33% | 33% | 0% | 11% | 0% |
| 問7 | 2 | 4 | 2 | 1 | 0 | 0 |
| | 22% | 44% | 22% | 11% | 0% | 0% |
| 問8 | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 0 |
| | 11% | 22% | 33% | 11% | 22% | 0% |
| 問9 | 3 | 2 | 1 | 1 | 2 | 0 |
| | 33% | 22% | 11% | 11% | 22% | 0% |

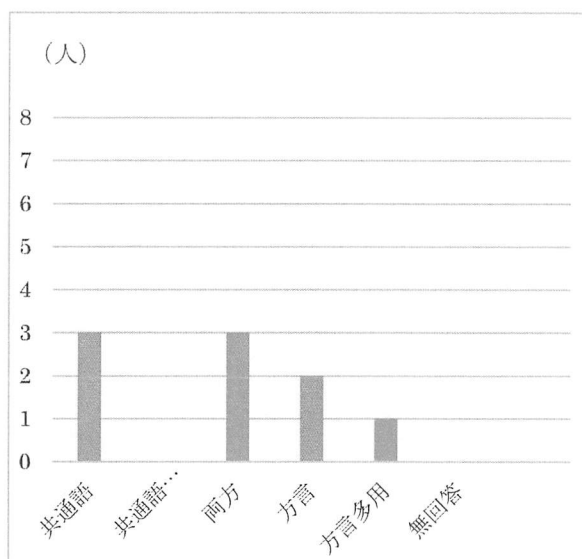


図3 里町問4回答結果

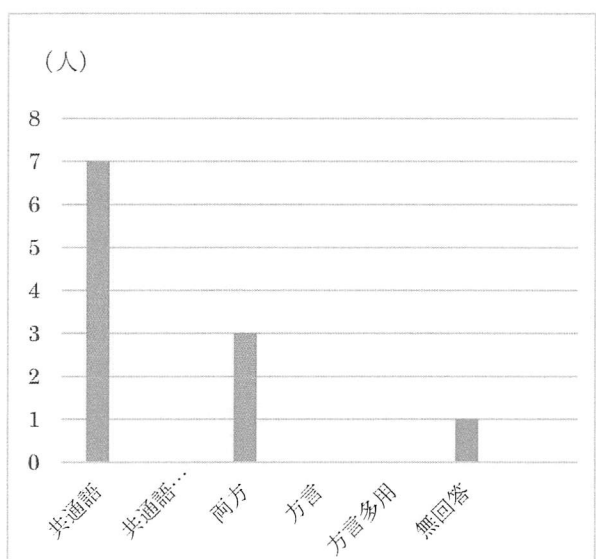


図4 上甌町問4回答結果

7. アンケート結果の分析

5段階式回答と選択式回答及び記述式回答からアンケート結果を以下に分析した。分析の結果だけでは理解しにくいと思われるため、重複する部分もあるが、前述の結果の記述も加えた。

7.1 全体に関して

- 1) 担当の区域の方言への理解度に関して、3～4人が完全に分かるわけではないが全くわからないわけでも無い、との回答であった。地域差も顕著ではない。
- 2) 5段階式回答では、方言を知らないことで困ったことは多くは無かったが、個別の回答になると、「面接の時、意味が分からなかった」や4人が「話が理解できなかった」との回答をしている。このことから、困った経験は多くの人が持っているようである。この質問に対してもあまり地域差はないようである。
- 3) 方言を理解できたことで良かったことに関しては、全体としてはある程度あるとの答えであった。

それはどのようなことか、との質問には、5人の人が相手の気持ちが理解でき、伝え、スムーズに共有できるとあり、その他にも肯定的な意見が多かった。

- 4) 住民の方との会話は共通語で行われているのか、との質問には圧倒的に多くの人が共通語と答えている。これは、共通語が広く行き渡っていることと、支援者は担当地域の出身でないため、その土地の方言が使用できないことがその理由であろう。方言札等を使用しての標準語励行運動があったため、共通語が使用できない人はほとんどいないようである。住民から方言札に関することなど関連の話を多く聞いたが、ここではこれ以上言及しない。他の機会に扱うこととする。
- 5) 子供たちが方言で話しているのを聞くかどうかの質問に対して、ほとんどは聞かないとのことである。子供たちが方言を使用する機会はかなり減っていると思われる。
- 6) 学校での方言教育の必要性に関しては多くの人が必要だと答えている。「方言特有の微妙な気持ちを言い表せることができる」と「なくなってしまう」との意見がそれぞれ複数の回答があった。特筆すべきことは、「子供たちが方言を通して地域に興味を持つようになったから」という回答があったことだ。これは、近年、方言がマスコミ等で盛んに取り上げられ、全国的な方言へ関心が高まったこととも関連する動きである。自分の地域の方言は好きかどうかとの質問には多くの人が、ある程度以上の関心を持っていることがわかった。多くは肯定的であったが、否定的な意見もあり、「英語が必修となれば、そちらを優先してほしいから」との回答があった。
- 7) 多くの人が方言が好きだと答えている。
- 8) 多くの人は方言が（もっと）できるようになりたいと答えている。
- 9) 次の世代にも方言を伝えたいと多くの人が思っている。伝えたいとの理由としては、「地域の文化や伝統を残してほしいため（2）」があがっているが、否定的な考えも有った。問8の回答として「英語が必修となれば、そちらを優先してほしいから」の意見が出ていたのは方言に対する自分の心情的なことより、子供達の将来性を考えているのが反映された結果であろう。
- 10) 方言で好きな言葉として4人が「おおきに」をあげている。日本のどの地方の方言でも良いとの解釈で答えたのか、不明である。今後、何等かの形で確かめておきたい。
- 11) 方言で嫌いな言葉は2つしかあがっていない。
- 12) 方言は将来どのように使用されるべきか、に対しては「日常の中で自然な形で使われてほしい」と、「様々な年代の人とのコミュニケーションの1つとして」がそれぞれ複数回答であった。
- 13) 方言に関することなら何でも書くよう求めたものとして、「わからないときに聞き返すことによってより良いコミュニケーションをとることができると思う」が有り、方言ができなくても、そのことを利用してコミュニケーションを取るというのも良い試みであると思われる。

7.2 里町と上甑町の調査結果の比較

両者の違いはあまり見られなかったが、上甑町の調査結果では問5、6、7、8などで比較的低い数字が多かったことから方言教育や保存にやや消極的なのではないかと考えられる。前述した木部の「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書」でも、住民の方言の保存に前向きな態度とそうではない面も紹介している。この調査でも「方言が次世代にも使われることを支持」している人が多かったが、「そうである」と答えた一方で、家庭では方言を使用していない人が多い。その理由の一つとして、木部（2011）も述べているように、昭和50年代までの共通語教育および方言禁止教育の影響で「方言は悪いことば」という意識が植え付けられたことが挙げられるであろう。

8. 考察

今回の調査で明らかになったことは次のことである。まず、支援者と方言話者との会話は共通語との両方を使用しているとの答えが多かったのには納得したのだが、共通語のみ、との回答がそれより多く最多だったのが予想外であった。それは、方言に対する支援者側の理由だけでなく、方言話者が共通語の使用に不自由しないということである。このことは、以前は共通語を理解しない、または使用に不自由を覚える方言話者が多く存在したということを考えると、高齢者の間でも共通語使用が普通になったことを意味している。これは方言を理解しない担当者でも高齢者との会話に「困らない」と回答した人が4の1程度いたことでも高齢者における共通語の普及度が分かる。しかしながら、「話が理解できない」等の回答があったことから、まだ共通語での意思疎通が不自由な高齢者が存在することが分かる。

「学校での方言教育の必要性」に関して「必要だ」、あるいは「方言が好きだ」との回答が多かったのには現在の潮流を見ることが出来る。標準語励行運動が行われ方言を使用しないことが奨励されていた明治や昭和の時代に比べ、現在では逆に学校で方言教育が行われていて現代における方言教育の意義と必要性が認識されていることを感じた。また、担当地域の方言が理解できない場合聞き返すことにより、逆にそれをコミュニケーションの手段に変えるなど、方言に対する積極的な姿勢とともに方言使用を相手との良い接点と見なして活用する場面も現れるなど、方言への意識が肯定的であることにも新しい動きが感じられた。また、方言の保存への肯定的意見には伝統文化継承としての方言の価値が認めているだけではなく、方言への関心をきっかけとして子供達が地域へ関心を持つようになったとの記述から、学校での方言教育が地域社会と若年層との間を繋ぐものとしての機能も果たしていることが見受けられた。

以上のように現在の状況では高齢者と地域住民との間の方言使用や学校での方言教育は概して地域社会の伝統の継承のみでなく、潤滑油として、あるいは地域の活性化としての役割を果たしていることがわかった。一方で、忙しい現代社会では英語教育等、他にも力を注ぐ必要のあることが多いため、それらと間で調整をしながら、方言教育も進めていく必要性を感じた。

9. おわりに

今回は当初の予定していた住民へのアンケートの回答が予想より少なかったことは今後の調査で補う必要があるが、見落とされがちな支援者側の方言に対する考えを聞くことができたのは大きな成果であった。「年配者が方言のことについて質問され、それに対して答えることができることを喜びに感じ、それが生きがいにも繋がっている」とのことが福祉課の職員からあった。また、住民本人たちからも同様の意見があり、今後もこのようなことをして欲しいとの要望があった。

言葉に関しては、アンケートの回答にも、地域により方言が異なる、との意見もあることから、今後、更に言語面の調査を行うとともに、方言の持つ影響力を活用して、方言の継承のみでなく、住民の生活に少しでも役立つことはないか、考えて行きたいと思う。

謝辞

本稿は鹿児島国際大学附置地域総合研究所令和元年度清水基金プロジェクトの助成を受けて調査した内容を基に執筆しました。調査に当たっては薩摩川内市社協上甑支所長の川崎康弘様他所員また地域住民の方々に大変お世話になりました。グラフ等の作成には学生（川畑さん、前田さん、森田さん）の協力を得ました。ここに、皆さんに感謝申し上げます。

参考文献

1. 木部暢子他（2011a）,『「人口推移から見る危機的な言語・方言」文化庁委託事業 危機的な状況ある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国立国語研究所
2. 木部暢子他（2011b）,『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』 国立国語研究所
3. 窪田晴夫他（2015）,『大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」 サブプロジェクト「鹿児島県甌島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」甌島里方言記述文法書』国立国語研究所

参考資料

1. 甌島観光局ホームページ（2020年1月10日）
<https://satsumasendai.gr.jp/koshiki-sight-seeing/go-to-koshiki-shima/>
2. 薩摩川内市ホームページ（2020年1月10日）
<https://www.city.satsumasendai.lg.jp/www/contents/1186033725484/index.html>
3. 薩摩川内市地図サービス（2020年1月10日）
<https://www.sonicweb-asp.jp/satsumasendai/>